

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12303

研究課題名(和文) 母親の感じる育てにくさを解消するサポートプログラムの構築

研究課題名(英文) Creating a Support Program to Resolve Difficulties of Child-rearing Experienced by Mothers

研究代表者

平田 良江 (HIRATA, YOSHIE)

山梨県立大学・看護学部・教授

研究者番号：50326097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、健康な乳児を育てる母親の感じる育てにくさと、子育ての捉え方を明らかにした。子育て中の母親たちは「育てにくさ」を感じておらず、育児について【育児を仕事志向する】<育児の抱え込み><培われた成果主義><完璧主義>【予想と現実の乖離】<泣きへの困難感><育児への見通しが持てない><理想と異なる育児>【環境から受ける閉塞感】<閉鎖された空間><子どもとの密接すぎる関係><社会からの孤立><ネット上の情報に混乱>と感じていた。キャリア形成に伴い培われた考えや環境に影響されている可能性が示唆された。サポートプログラム構築の研究は、対象者が得られず実施されていないため、今後の取り組みとしていく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

健康な乳児を育てる母親たちは、「育てにくさ」を感じていない。それよりも「育てにくさを感じる環境に置かれる」ことが問題であるということが明らかになったことは意義がある。特に、有職の母親にその傾向が強く、育児を仕事と同じように捉え、成果を求められるといった思いや予想と現実の乖離に苦しんでいた。そのため、今後は早期からの有職者を対象とした母親学級を計画し、育児は仕事ではないこと、それによって母親が評価されることはない、さらには予想と現実の乖離を最小限にするための具体的育児指導を検討し、子育て中の母親たちが育てにくさを感じず子育てできる状況に貢献したい。

研究成果の概要(英文)：This research is to clarify the difficulty of child-rearing experienced by mothers rearing healthy infants. They did not feel any difficulty in child-rearing. Three categories and 10 sub-categories were extracted regarding how the mothers perceived child-rearing: [Conceive child-rearing to be a career] <Carrying the burden of child-rearing by oneself> <Fostering achievement-oriented approach> <Perfectionism>, [Discrepancies between anticipation and reality] <Confusion regarding infants crying> <Having no foresight for child-rearing> <Child-rearing being far short of ideal>, [Sense of stagnation] <Secluded environment> <Excessively close relationship with infant> <Social isolation> <Confusion derived from information on the Internet>. The analytical results indicate that it is probable that the way child-rearing is perceived by mothers rearing healthy infants is influenced by ideas and perceptions that mothers foster during their careers, as well as the environment they are in.

研究分野：母性看護学

キーワード：母親 乳児 育てにくさ

1. 研究開始当初の背景

近年、少子化・核家族化が進み、家庭において子育てを中心的に担う母親の孤立化は大きな社会問題となっている。かつて家族や近隣の人の手助けの中で行われてきた子育ては他者との関わりが希薄化する中で失われ、親子だけで日中過ごす密室育児を余儀なくされ、社会的孤立によって支援が必要な家庭ほど、親が追いつめられてしまうという厳しい現状が指摘されている(2015 奥山)。その結果、子育て家庭の「社会的孤立」により、育児の不安や困難感を母親一人が抱え込むことで育てにくさが増強し、それが育児の拒否に繋がり、最終的に子どもを虐待するといった問題に発展しかねない。

厚生労働省は、「健やか親子21(第2次)」重点課題の一つに、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」を挙げている。育児不安や困難感は、「育てにくさ」を感じる親には特に強く表れる。この「育てにくさ」は、子どもの心身の状態や発達・発育の偏り、気質、疾病などによる子ども側の要因、親の子育て経験の不足や知識不足によるもの、母親の抑うつ、自信のなさや夫・家族との関係性の不良といった、母親側の要因が報告されている。母親に寄り添う専門職には、親の感じる「育てにくさ」の本質を見極め、母親、子ども、親子を取り巻く環境を包括した支援の提供が求められている。

一般的に「育てにくさ」の概念は広く、一部には発達障害などが原因になっている場合もあるとされている。母親の中には、子どもの発達に不安を感じ育てにくいと感じていた事例や、明らかに発達障害がある子どもの場合には、早くから子どもを育てにくいと感じていた例もある。しかし、育てにくい子どものすべてに発達障害があるわけではない。稲垣(2006)は、外界に対して慣れにくい子を扱いにくい子と称し、乳幼児の子どもの1割がそうであるとも述べている。一方、育てにくいと感じている母親の問題も指摘されることがあり、育てにくさの構造は明らかになっていない。

現在までの多くの研究では、「育てにくさ」というキーワードについて子ども側に主眼がおかれ、発達障害の子どもを対象とした早期スクリーニング法の開発の研究や、虐待リスクと結びつけた支援法についての研究が中心となって行われている。しかし、子ども側に何らかの問題があっても育てにくいと捉えずに子育てしている母親もいれば、何ら問題がないにも関わらず育てにくさ、大変さを訴える場合もある。したがって、子ども側の問題として捉えるのではなく、母親が何をどう感じ育てにくいとしているのか、インタビューを通して明らかにしたいと考えた。「育てにくさ」を感じる母親の複雑な心理や、それに伴う育児中の詳細な状況を捉えるためには、母親の語りに着目することが最も重要なことである。

母親が育てにくいと感じている事実は動かしがたいものであり、その育てにくさの事実に対し、何らかのアプローチをしなければ、母親の育児不安や困難感は増大し孤立化はさらに深刻さを増してしまふ。子育て中の母親が感じる育てにくさの構造を明らかにすることは、今後の母親に対するケアの再考に重要である。

2. 研究の目的

乳児を育てる母親が子育てにおいて感じる育てにくさの構造を明らかにし、母親に対する支援の方向性を検討することを目的に研究に取り組んだ。

研究 乳児を育てる母親が子育てにおいて感じる育てにくさの構造を明らかにし、母親に対する支援の方向性を検討する。

研究 日本における母親の感じる「育てにくさ」の概念分析を行い今後の研究と子育て支援への示唆を得ることを目的とする。

研究 健康な乳児を育てる母親が感じる「育てにくさ」とそれに影響を与える要因を明らかにし、母親に対する支援の方向性を検討する。

研究 産後の生活上のイメージをつけるための対話型両親学級を開催し、その効果を産後の家庭訪問で検証し支援プログラムを構築する。

3. 研究の方法

研究は、乳児を育てる母親の感じる「育てにくさ」を明らかにするために、インタビュー調査を行うこと、「育てにくさ」の概念分析を行い概観すること、それらからアンケート調査を実施し、「育てにくさ」に影響を与える要因を探索すること、さらには必要とされる支援プログラムを構築することで構成された。

研究

(1) 研究デザイン：質的記述的研究

(2) 調査対象

A 県内の産前産後ケアセンター、子育て支援センターに来所している母親 15 名。

(3) 調査内容

a. 対象者の属性（年齢、初産、支援者の有無）

b. インタビューガイドを用いた、半構成的面接法にてインタビューを実施。

研究

検索キーワードに「育児」「子育て」「育てにくさ」「育児困難」「child rearing」「difficult」を用いて検索した。医学中央雑誌 Web 版、CINAHL、MEDLINE、PubMed を用い 2008～2018 年を調べた。検索の結果、英文献の内容は薬物使用、貧困、人種、若年といった母親の特殊な背景に着目したものが主であったため、入手可能な和文献 34 件を対象とした。概念分析は Rodgers のアプローチを用い、概念の属性と先行要件、帰結を明らかにし、概念の定義を明確にした。倫理的配慮として著作権の保護に努めた。

研究

(1) 研究デザイン：関係探索デザイン

(2) 研究対象

A 市内の保育園に乳児を預けている母親および、子育て支援センター、産前産後ケアセンターに来所した母親 200 名。A 市の 1 年間の出生数は約 1,400 人。厚生労働省によると H27 年の保育園の入所率は 38.1%であることから、約 500 人が 1 年間に保育園に入所すると推察した。その内の半数の協力と、子育て支援センター、産前産後ケアセンターに来所する母親に依頼をし、7 割の協力が得られると推定し、200 名程度とした。

研究

(1) 研究デザイン：観察研究

(2) 研究対象

妊娠後期（妊娠 32 週～36 週）の初妊婦とパートナー、研究者が計画するマタニティクラスを受講し産後 1 ヶ月以内の家庭訪問に応じた母親 3～5 名

4. 研究成果

研究

協力の得られた 15 名の母親のうち、研究対象は 14 名であった。平均年齢は 34.0 歳 ± 4.1 歳、初産 6 名、経産 9 名で、12 名が有職者であった。データ収集時の子どもの月齢は 3 ヶ

月3名、4ヵ月2名、5ヵ月1名、6ヵ月4名、12ヵ月4名であった。インタビューから明らかになったことは、「育てにくさ」を感じている母親はいなかった。母親たちは「育てにくさ」は感じないとしつつも、「自分に余裕がなく追いつめられている気がする」「虐待する人の気持ちがわかる」と育児上の大変さを語った。また、「育てにくいって言われるとなんかちょっと違う。もしかしたらそれこそ育てにくい環境に置かれているのかなって感じる」と、自身の置かれた環境により育児上の大変さが高まり、それが母親の許容範囲を超えると育てにくさを感じることに繋がる可能性が示唆された。母親の語りから育てにくさに繋がる要因として【育児を仕事志向する】【理想と現実の乖離】【環境から受ける閉塞感】の3つのカテゴリーと 育児の抱え込み 培われた成果主義 完璧主義 泣きへの困難感 育児への見通しが持てない 理想と異なる育児 閉鎖された空間 子どもとの密接過ぎる関係 社会からの孤立 ネット上の情報に混乱 の10のサブカテゴリーが抽出された。さらに母親たちは、育児をする中で育てにくい環境下に置かれ続けると、 乏しい自己肯定感 の持続で 自分に対して否定的 となり【著しい自己否定】に陥っていた。

研究

「育てにくさ」とは【育児に伴う不安・心配】【子どもとの不調和感】【泣きへの困惑感】の3つの属性、【不十分なサポート】【母親の性格】【子どもの特性・気質】の3つの先行要件、【子どもへの否定的感情】【母親としての不適格感】の2つの帰結が抽出され、母親の感じる育てにくさとは「母親自身が子どもと子どもがいる生活を受け止められず、否定的感情が生み出されること」と定義された。子どもの特性・気質、母親の性格という子どもと親の要因、子どもとの不調和感、不十分なサポートという子どもとの関係性や環境要因が育てにくさを構成していた。看護者は、子どもと母親およびサポート状況を充分見極め、子どもや子育てを受け止められない事態の分析と解決に繋がる適切な援助を行うことが必要であると示唆された。

研究

研究の結果からアンケート調査を計画し、母親の感じる「育てにくさ」とそれに影響を与える要因を明らかにした。グーグルフォームを用いた質問紙調査に回答が得られたのは132名(57.3%)。すべてが有効回答であった。仕事ありが118名(89.4%)、なしは14名(10.6%)、支援者あり130名(98.5%)、なし2名(1.5%)であった。支援者の主な者はパートナー116名(87.9%)、実母84名(63.6%)、義母84名(63.6%)であった。

132名のうち育てにくさを感じるは11名(8.3%)、感じないは96名(72.7%)、どちらともいえないは25名(18.9%)であった。

子育ての受け止め方を4件法で聞いた質問15問を対象に探索的因子分析(主因子法、因子の数:相関行列固有値1以上の数、プロマックス回転)を行い、潜在因子を検索した。その結果、15項目において14項目が因子負荷量0.3以上を示し、1項目のみ0.23であったため除外せずに第1因子に加え、5因子に要約できた。5因子はそれぞれ<育児拘束感><育児不安感><育児責任感><育児疎外感><育児にまつわる情報獲得>とした。

第1因子<育児拘束感>は「自分の生活全体が計画通りに進まない」とイライラする」「育児で自分の自由がない」など5項目であった。第2因子<育児不安感>は「子どもの泣いている理由がわからず困惑する」「今はトンネルの中にいるようで先が見えない」など3項目、第3因子<育児責任感>は「子育てには成果が求められる」「周囲からの評価が気になる」など3項目、第4因子<育児疎外感>は「子どもと二人でカプセルの中に入っているようだ」「社会から取り残

される感覚がある」の2項目、第5因子<育児にまつわる情報獲得>は「気がかりなことはインターネットで情報を集める」の1項目であった。

「育てにくさ」の有無と年齢、5因子の関係について一元配置分散分析を行い、効果量を算出した。<育児拘束感><育児不安感><育児責任感>が育てにくさに強く関連していた。対象の背景とサポートの有無、サポートの種類と育てにくさの関連を検討した。サポートのない人の方が有意に育てにくさを感じていた。仕事の有無、子どもの数、サポートの種類と育てにくさの関連を検討したが差は認められなかった。

研究

研究 ～ を踏まえて、育児支援プログラムを検討した。まずは妊婦とパートナーが妊娠中に産後の生活の具体的なイメージを持つことで、産後に抱くギャップを最少にすることができ、産後の生活への移行がスムーズになると考え、産後の生活上のイメージをつけるための対話型両親学級を開催し、その効果を産後の家庭訪問で明らかにしたいと研究を計画した。マタニティクラスの講師は研究者、地域の助産師、保育士とした。育児や生活のイメージ化が図れるだけでなく、自分自身の傾向(育児を自己の評価と繋げるなど)を明らかにし、ありのままの自分が心理的に無理なく子育てできる環境をパートナーと話し合っ作れるようなクラスの準備を行った。

妊娠後期(妊娠32週～36週)の初妊婦とパートナーを研究対象とし、研究者が計画するマタニティクラスの受講と産後1ヵ月以内の家庭訪問に応じてくださる協力者を募集した。

マタニティクラス開催のチラシを病院、診療所、フリーペーパーへの掲載にて参加者を募集したが、予定の期間に協力者を確保することができず、実施には至っていない。

今後、これまでの研究成果をもとに、地域の助産師、保健師、保育士と協力してマタニティクラスを実施し、妊娠期から育児期を通した地域における子育て支援プログラムを検討する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平田良江 名取初美 萩原結花
2. 発表標題 日本における母親の感じる「育てにくさ」の概念分析
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	名取 初美 (Natori Hatsumi) (10347370)	山梨県立大学・看護学部・教授 (23503)	
研究分担者	萩原 結花 (Hagihara Yuka) (50381710)	山梨県立大学・看護学部・准教授 (23503)	